

発行  
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018  
札幌市中央区北 18 条  
西 15 丁目 3-19 安藤方  
電話・FAX 011-556-8834  
hokkaidopolandca@gmail.com

# POLE

第 95 号 2018.9.15  
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会  
東京事務所  
〒107-0052  
東京都港区赤坂  
9-6-29-309  
音響計画(株) 霜田気付  
電話 03-6804-1058  
FAX 03-6804-6058



## 第 32 回定例総会と懇親会にお越しくだけさい



会場 豊平館 (中島公園内)

日時 2018 年 11 月 11 日 (日)

16:00~ 総会 1F 下の広間

17:30~ 懇親会 2F 広間



総会: 入場には入場券が必要(入り口でポ文協の係りの者が手渡します)

懇親会: 開場17時(その前に来て館内を見学する場合は入場料 300 円が必要です)



今回は初めての試みとして、札幌市の国指定文化財である豊平館で総会と懇親会を行います。豊平館は明治 12 年に開拓使によって建てられた本格的な洋式ホテルですが、いまは市民に開放されています。美しいたたずまいと華麗な内装が魅力的です。

1階「下の広間」で総会のあと、2階「広間」で恒例のパーティを行います。

参加費は無料ですが、各自食べ物または飲み物を一品持参する持ち寄り(ポットラック)方式とします。手作りケーキからコンビニのおにぎりまで何でも歓迎です。同じテーブルに並べて誰でも自由に取れる形式にしましょう。会員以外の方の参加も歓迎します。

会場のピアノを利用して、歌、演奏、合唱、ダンスなど、いくつかの楽しいパフォーマンスを計画しています。飛び入りも歓迎します(右下の写真は 2014 年の「午後のポエジア」の様子で、イメージです)。

ポーランドと日本を中心に、国境を越えた国際的な文化交流の場となることを期待しています。

みなさまのご協力をお願いします。

ポーランド独立回復  
百周年の記念日に  
豊平館で手作りパーティ

どなたも入場無料  
ポットラック式パーティ  
(一品持ち寄り)



### ポットラック式パーティとは

サンドイッチ、ケーキ、クッキー、ピザ、サラダ、くだもの、お寿司、おにぎり、海苔巻き、ビール、ワイン(栓抜きつき)、お酒など何でも一品を選んで、一人前よりも少しだけ多めにご用意下さい。なお、多少のソフトドリンクとオードブルは協会でご用意します。



〈創立 30 周年記念演奏会、Kitara 小ホール、2018.6.23 より〉

## 現代に生きるショパン

三浦 洋

本日は、本協会創立 30 周年記念演奏会にお越しいただき誠にありがとうございます。

プログラムには、ショパンをはじめパデレフスキ、シマノフスキ、バツェヴィチ、タンスマンら、ポーランドの代表的な作曲家の作品がずらりと並んでいます。こういう演奏会は国内では大変珍しく、その意味ではどの曲も聴く価値のある作品ばかりですが、プログラムの中でとくに目立つのはショパンのバラードだと思います。全部で 4 つあるバラードのうち 3 曲が演奏されますので、聴き比べる楽しみがあります。第 1 部でお聴きいただいた第 3 番と第 4 番はショパンの成熟期の作品であるのに対し、次に弾かれる第 1 番は若い頃のショパンが自分の音楽を模索している時代の作品、いわばショパンがショパンになっていこうとする時期の傑作です。

実は、この曲は 230 曲以上あるショパンの作品の中でもおそらく最も時間のかかった作品で、完成までにざっと 5、6 年かかっています。21 歳のころに作曲しはじめ、26 歳のときに楽譜が出版されたのですが、「バラード」というまったく新しいジャンルの音楽を作ろうとショパンが思い立ったのはもっと早く、十代の頃だろうと推測されています。当時、ポーランド(リトアニア)にミツケヴィチという大詩人がいて、バラードとかロマンスと呼ばれる物語性を持った詩を書いていました。ショパンはこの詩人から影響を受けて、器楽のジャンルとしては歴史上はじめてバラードというものを構想したと考えられています。

その最初が第 1 番ですから、ショパンはバラードをどんな音楽世界にするかを考え、推敲に推敲を重ねて完成させたわけですね。私は、完成度の高いこの曲のおかげでピアノが芸術音楽として普及したという面がかなりあるのではないかと思います。何を表現しているのだろうと考えさせる深い芸術性を持ちながら、同時に適度な親しみやすさもあって、この曲をテーマにした漫画も描かれ、ピアノコンクールの課題曲としても定番になっています。

そして、この曲は今年また特別な活躍をしました。皆様ご記憶かと思いますが、今年 2 月に開催された平昌オリンピックでフィギュアスケートの羽生結弦選手が、ショートプログラムでバラード第 1 番を使いました。羽生選手は数年前、ショートプログラムで世界最高得点を記録した時にもこの曲を使い、その時の感触がとてもよかったですので平昌でも再び使ったのだそうです。しかし最初に使ったときには、

かなり苦労されたようです。この曲は、標準的な演奏で 9 分か 10 分かかっていますが、ショートプログラムはわずか 2 分 40 秒ですから、使えるのは曲の 3 分の 1 以下です。そのため羽生選手は、曲の最初と最後をうまくつないで使っていました。

この曲は最初と最後に特徴があり、音楽用語で「ナポリ 6 度の和音」と呼ばれる、ちょっとエキゾチックな響きの和音が使われています。出だしの部分は、「昔々あるところに…」と物語を始めるような 7 小節の序奏なのですが、そのときにナポリ 6 度の和音が響いて、これから現実の世界を離れて物語の世界に入りますよ、という雰囲気醸し出します。そして、主部でバラードの劇的な物語が展開されると、また最後にナポリ 6 度の和音が響き、もうすぐ物語が終わって現実に戻りますよ、と知らせる構造になっています。ですから、羽生選手は、この曲の最初と最後の特徴的な部分を生かしながら、中ほどの劇的な部分を濃縮して、大変うまくバラード 1 番を再構成しているといえます。音楽は沈黙から始まって沈黙に終わりますので、静止から始まって静止に終わるフィギュアスケートとは実に相性がいいなと、羽生選手の演技を見るたびに思います。

バラードという言葉はもとラテン語のバラレーという言葉からできたもので、踊るとか回転するとかいうのがもとの意味です。フランス語のバレエとか、英語で舞踏会を意味するボールも最初の 4 文字が ball で語源はバラードと同じですから、回転わがが多く、踊りの要素に富んだフィギュアスケートに羽生選手がこの曲を使ったのは、本当に天才的な直観だと思います。それに、この曲の中心部の 4 分の 6 拍子は、ドラマティックな羽生選手の演技に実に合ったリズムだと思います。羽生選手には国民栄誉賞が贈られることが決まりましたが、ショパンは 180 年後に自分の曲がフィギュアスケートに使われるとは夢にも思わなかったでしょう。

もうひとつ平昌オリンピックの話をさせていただきますと、フィギュアスケートをテレビで見ているとしたのは、ベートーベンの「月光」ソナタ嬰ハ短調を使った選手がいて、同じ日にショパンの遺作のノクターン嬰ハ短調を使った選手もいたことでした。ショパンの名曲には#が 4 つ付く嬰ハ短調で書かれた曲がとても多いのですが、私はこれが「月光」ソナタからの影響ではないかと以前から考えています。先ほど申し上げたナポリ 6 度の和音は「月光」ソ

ナタでも使われていますから、「月光」ソナタとショパンの遺作のノクターンが同じ日に登場したことが単なる偶然とは思いませんでした。本日の演奏会では遺作のノクターンこそありませんが、第2部の最後で弾かれるエチュード作品 25-7もこの嬰ハ短調ですので、この調独特の心に染みるようなノスタルジックな雰囲気味わっていただければ幸いです。

今日のプログラムには、もうひとつとっておきの曲があります。それは第3部でお聴きいただくポーリーヌ・ヴィアルドの歌曲です。ヴィアルドはパリでショパンにピアノを習った女性ですが、もともと家系はスペイン人で、旧姓をガルシアといい、恵まれた音楽一家に育ちました。3オクターブ半の声域を持つメゾソプラノ歌手として有名になりましたが、作曲も手掛け、絵も描けば、数カ国語で詩も書くという多才の人で、ベルリオーズやブラームスから絶賛されたほか、ロベルト・シューマンの妻クララ・シューマンは「私がかつて出会った最も才能ある女性」といっており、ロシアの文豪ツルゲーネフを虜にした女性としてもよく知られています。

このポーリーヌは、ショパンと暮らしていたフランスの女流作家ジョルジュ・サンドからも一目置かれていて、サンドの仲介でレイ・ヴィアルドというパリのオペラ劇場の監督と結婚しました。二人の結婚式にはショパンとサンドがそろって出席し、ほとんど仲人の役を果たしたようですから、いかに彼らの人間関係が親密だったかがわかります。

こんなふうにはショパンたちと親しかったポーリーヌは、ショパンのマズルカから名曲 12 曲を選びだし、フランス語の歌詞をつけて歌うという、それまで誰も思いつかなかったことをしました。記録によりますと、ショパン本人がピアノ伴奏してポーリーヌが歌うとい

う、夢のようなコンサートが、ショパンの生涯の絶頂期にあった 1842 年 2 月にパリでありましたし、ポーリーヌはいなかったものの、ショパンの生涯最後のコンサートに当たる 1848 年のロンドンでもこの作品が取り上げられたそうですので、ショパン公認の作品といってよいと思います。

このあと松井亜樹さんが歌われるのはその中の 2 曲で、作品 33-2「Aime-moi 私を愛してください」と作品 7-3「Faible coeur 弱い心」です。私はこの歌を CD でしか聴いたことがなく、ライブで聴くのは今日が初めてですが、松井さんもこれらの曲を歌われるのは初めてだそうですので、今日お越しの皆様は本当にラッキーだと思います。松井さんはこれまで、ショパン自身が作った歌曲を数多く歌ってこられたので、そのご経験が今日の歌唱に活かされるにちがいありません。

最後に、今年 2018 年は、18 世紀末に消滅したポーランドという国が第一次世界大戦後の 1918 年に独立を回復して 100 年という、特別な記念の年に当たりますので、ポーランドの音楽を集めたこの演奏会を開催できることは大変うれしいことで、きっと天国のショパンも喜んでくれていると思います。どうぞ最後まで演奏会をお楽しみください。

(みうら・ひろし)



創立 30 周年記念演奏会の出演者



ポーランド&ニッポン歳時記



錫婚式

結婚十周年を迎えました。節目の記念日は家族が集まる良い機会です。皆たいい様々なプレゼントを持ち寄りますが、今回その中にはチェリーとクランベリーがありました。さっそくチェリーはパイにし、クランベリーからはジャムを作りました。

przelotny deszczyk	雨やどり
owady się schroniły	我が家の軒で
pod naszym dachem	虫の群
Monika Tsuda, Poznań	ポズナン市、津田モニカ

pod mgiełką skryty	雲の間に
taniec marsa z księżycem	月夜とダンス
ponad drzewami	火星かな
Piotr Wrzeciono, Warszawa	ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

呑み干すはラムネに溶けし憶ひ出よ  
 バラ園のバラの呼吸で蝶とべり  
 扉開け本尊引越し夏の寺

岩見沢市、霜田千代磨

〈第 86 回例会、北海道大学クラーク会館講堂、2018.8.10〉  
**マルタン・グレゴリウス 北大オルガンを奏でる**  
 ～ポーランド オルガン音楽の 500 年～

ニコラウス・クラコヴィエンシス(クラクフのミコワイ、16世紀はじめ)		ポーランド聖歌「聖なる神」による即興曲 作品 38	[10分]
前奏曲へ調	[1分]	フレデリック・ショパン(1810～49)／フランツ・リスト(1811～86)	
ポズナンのエール(古いポーランド舞曲)	[1分]	前奏曲第4番ホ短調 作品 28-4	[2分]
サルヴェ・レジナ(元后あわれみの母)	[1分]	フレデリック・ショパン(1810～49)／ウィリアム・トーマス・ベスト(1826～97)	
ハイドウツキ(古いポーランド舞曲)	[1分]	前奏曲第20番ハ短調 作品 28-20	[2分]
作曲者不詳:グダニスクのオルガンタブラチュア譜より(1591) 幻想曲風	[2分]	ミハウ・クレオファス・オギンスキ(1765～1833)／アンジェイ・クピェツ	
作曲者不詳:オリヴァ大聖堂のオルガンタブラチュア譜より(1619) 舞曲風組曲	[4分]	ポロネーズ「祖国への別れ」	[3分]
ヴォングロヴィエツのアダム(? ～1629)		カロル・シマノフスキ(1882～1937)／アリストテア・ワイトマン(*1947)	
リチェルカータ第3施法	[2分]	練習曲第3番変ロ短調 作品 4-3	[4.5分]
ヴワディスワフ・ジェレンスキ(1837～1921)		マリアン・サヴァ(1937～2005)	
オルガンのための前奏曲作品 38-23「御手にゆだね」	[5分]	踊る絵	[5.5分]
ミェチスワフ・スジンスキ(1866～1924)		マルタン・グレゴリウス(*1991) 即興演奏	[9分]
奇想曲嬰へ短調 作品 36	[7分]		

### プログラムノート

ニコラウス・クラコヴィエンシスは、ルネサンス時代のポーランドでは最も著名な作曲家の一人でした。古都クラクフの出身で、この街で活動していたとみられます。彼の作曲した鍵盤および声楽の曲の作風は、ジョスカン・デ・プレ(1450/1455?～1521、盛期ルネサンス時代のフランスの作曲家、声楽家)の作風に通じます。今夜は、この作曲家の作品から4曲——さまざまな舞曲3曲と、伝統的にカトリック教会で歌われてきた聖母マリアを称える古い聖歌「サルヴェ・レジナ」(元后あわれみの母)をもとにしたポリフォニー様式の曲——をお届けします。

グダニスクのオルガンタブラチュア譜には、16世紀のオルガンや合唱のための楽曲が含まれています。この一群の楽曲は、多くは名前の知られていない、さまざまな作曲家の作品から成り、この貴重な歴史的宝物にはきっとオルランド・ディ・ラッソ(1532～94、後期ルネサンスのフランドル楽派の作曲家)の作品もいくつか含まれています。「幻想曲風」はヴィルトゥオーソ的なパッセージや装飾音から成る変化に富んだ曲です。

オリヴァは、現在はグダニスクの一部で、今はグダニスク大聖堂になっている中世の修道院で知られます。この地区では音楽の伝統がかなり遠い昔から発展していました。オリヴァ大聖堂のオルガン

タブラチュア譜は17世紀初頭に遡り、主にポーランド、ドイツ、イタリアの音楽文化に連なる作曲家たちのさまざまな作品を含んでいます。今夜のプログラムは「ホレア」(ギリシャ語で「舞踏」と呼ばれるさまざまな特徴の5つのきわめて短い舞曲から成ります。

ヴォングロヴィエツのアダムの生涯は、今日までその事績がほとんど残っておらず、生年月日すら不明です。この作品の主要部分は最近(1993年)リトアニア北西部のサモギティアのタブラチュア譜の中で発見されたもので、1617年に遡ります。この作品集からとった「リチェルカータ第3施法」は、ポリフォニー様式のパッセージと半音階のテーマからなるフガート的一种です。

ヴワディスワフ・ジェレンスキはオルガンのための25の前奏曲の作曲者で、それらは古典的な新ロマン派のオルガン曲の模範です。この一連の前奏曲に含まれる作品の一部は、ポーランドの宗教的作品的音楽テーマに基づいています。「御手にゆだね」もそのような曲の一つで、16世紀の同名の賛歌のテーマを用いています。この楽曲の詩文の作者は有名なルネサンス時代のポーランド詩人ヤン・コハノフスキで、「庇護の詩篇」として知られる詩篇91篇「隠れ場に住む人」の詩的な読み換えです。

ミェチスワフ・スジンスキは、ポーランドロマン派



の最もよく知られたオルガン曲作家の一人とされます。彼の「**奇想曲**」は、軽快で陽気な特徴の曲で、新ロマン派のオルガン音楽の中の印象派的傾向を代表するものです。「**ポーランド聖歌『聖なる神』による即興曲**」は、「トリサギオン」(聖三祝文)と呼ばれるギリシャ正教起源の古い賛歌をもとにした一群のヴァリエーションです。スジンスキの作品は、音楽のテーマがさまざまな形で表現される、多様な構造のヴァリエーションを含む、才気あふれる曲です。

**フレデリック・ショパン**の非常に有名な「**前奏曲**」の2つの編曲は、オルガンの特性に比較的よく適合しています。双方の楽器を用いるときに到達するかも知れない表現法の差異が、これらの楽曲の異なった解釈法を呼び出しています。2つの「**前奏曲**」はともにたいへんノスタルジックでメランコリックな作品で、長年にわたる在外生活の後、愛する故郷へ帰りたいという、ショパンの望郷の思いを表しています。

**ミハウ・クレオファス・オギンスキ**の「**ポロネーズ『祖国への別れ』**」は、とてもセンチメンタルな楽曲です。題名は、オギンスキが生きている間、ポーランドは国として存在せず、他の国々によって分割されていたという事実を指しています。オギンスキは作曲家であり同時に外交官でした。たくさん旅をし、さまざまな国で生活しました。「**ポロネーズ**」をとおして、彼は愛する、そして苦しむポーランドに別れを告げようとしたのです。

**カロル・シマノフスキ**の「**練習曲変口短調**」は、彼の最も有名なピアノ曲の一つです。この作品は、彼がショパンの音楽作品に大きな影響を受けた、作曲家の人生の初期に作曲されたものです。その特徴は、非常に感傷的で、ドラマチックで、哀悼的で

すらあります。18歳の若き作曲家のこの作品には、ある種の勇壮なハーモニーが含まれ、彼の音楽人生の後期においてシマノフスキの音楽作品を主導した新印象派的傾向をすでに予告しています。

現代ポーランドの作曲家**マリアン・サヴァ**作曲の「**踊る絵**」は、民俗舞踊に影響を受けた、6つの小品の連作です。ここにバルトックの民俗舞踊曲や小曲の一定の影響を聞きとる方もいるでしょう。またさまざまな伝統的な舞踊のリズムを発見する方もいるでしょう。小品の軽快で光輝くような特徴は、とても明晰で透明なテクスチャーによって達成されています。これらの特色は、多様な音階に基づく、いくつかの現代的ハーモニーと結びつき、オルガンの響きや仕様によく適応した、ユニークな曲を創り出しています。

今夜の私の「**即興演奏**」には、私の故郷を思い起こさせる、ポーランドの伝統的メロディやリズムを織り込みます。私がお客さまに、そしてこのコンサート全体に、この音楽をお届けするには、さまざまな理由があります。日本のみなさまには、私の故郷の音楽をご紹介します、共有したいと思っています。ポーランドのみなさまには、よく知られているメロディをとおして、私たちの国を思い出していただきたいと思います。この演奏会が特別なひとときとなることを願っています。

[後記]演奏会・交流会の歓迎に満ちた温かい雰囲気にとっても感謝しています。北大のみなさま、札幌市民のみなさまにポーランド音楽をお届けできてたいへんうれしく思います。また、北大の歌をプログラムに入れることができたことも大きな喜びです。

(マルタン・グレゴリウス、*Kitara* 専属オルガニスト)



ポーランドのオルガン音楽のみの演奏会など、日本広しと言えども、そうあるものではない。そのような貴重な機会ということもあり、当日は雨天にもかかわらず、300人以上の方々のご来場くださった。

実は、開演前にアクシデントがあった。オルガニストは事前に何時間もかけて音色の組み合わせの操作をオルガンに入力しておく。今回もその作業が前日までになされていたのだが、当日マルタンさんが会場に来てみると、データが全て消えていたのだ。真っ青になったはずだが、マルタンさんは集中して作業をやり直し、無事に本番を迎えた。

プログラムは、古い宗教曲から、ショパンのピアノ曲の編曲、また、現代曲や即興演奏など、実にバラエティーに富んだ内容である。演奏も素晴らしく、複雑なテクスチャーの細部がクリアに弾き分けられ、

曲により異なる色彩が生み出されていた。

そして、演奏会の最後にはちょっとしたサプライズもあった。当日マルタンさんがたまたま耳にした、北大の寮歌「都ぞ弥生」の旋律で即興演奏を披露してくださったのである。マルタンさんの深い音楽性と心遣いに、会場が温かな雰囲気包まれた。

(高橋 健一郎)



(左) 終わりの挨拶 (右) 交流会



# ブロニスワフ・ピウスツキの没後百年記念イベント

井上 絃一

今年はピウスツキが1918年にパリで客死してちょうど100年になります。命日の5月17日にはフランスのパリとモンモランシー、ポーランド南西部の都市ジョルイで追悼行事が催され、北海道・白老の旧アイヌ民族博物館でも、境内に立つピウスツキのブロンズ胸像へ向けて古式輪舞がしめやかに奉納され、その前後には《チセ》内の炉辺で《カムイノミ》が厳粛に挙行されました。

同館は本年3月に閉鎖され、2020年の国立アイヌ民族博物館としての再開を期して解体整地工事が本格化、勢い百年忌もささやかな催しとなり、参列者は在京ポーランド大使館のオスミツキ領事と藁谷領事部職員、北海道ポーランド文化協会からは安藤会長と新井・井上両会員の計5名でした。直前の申し入れにもかかわらず百年忌の実施を快諾して頂いた野本前館長には、この場をお借りして深謝申し上げますとともに、今後とも節目の折にはピウスツキの事績が想起されるよう祈念してやみません。

7月29日には北大学術交流会館で、同大学スラブ・ユーラシア研究センター、本協会、ポーランド広報文化センター主催、駐日ポーランド大使館後援のピウスツキ没後百年記念「講演と映画と朗読の集い～ポーランド、サハリン、北海道～」が開催されました(以下の講演要旨と、北海道大学総合博物館ボランティアニュース No.50:2018.9 所載安藤報告を参照)。1985年の第1回ピウスツキ国際シンポジウム、2013年の白老での胸像除幕をめぐる記念セミナーの会場

でもあった同会館に、5時間という長丁場にもかかわらず、150名近くの聴衆が参集される盛会でした。

11月11日には再生ポーランド共和国が百歳を迎え、2019年は日本とポーランドの国交樹立百周年に当たります。ポーランドではブロニスワフ・ピウスツキを日波文化交流の魁(さきがけ)として称揚する機運が高まっています。ジョルイでは特別展「アイヌの世界～ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂まで」が開催中で、5月22日にはポーランドで初の記念碑が除幕されました(本号 pp.10-11 尾形記事参照)。10月18～20日には古都クラクフとジョルイで第4回ピウスツキ国際シンポジウムが予定されています。

1979年春の札幌で呱呱の声を上げたICRAP(ピウスツキ業績復元評価国際委員会)は、どうやらその命脈を永らえているようです。願わくは、この松明が未永く燃えつづけますように…。 (いのうえ・こういち)



白老・追悼式で(2018.5.17, 野本正博氏提供)

〈第85回例会、北海道大学学術交流会館、2018.7.29〉

## 講演と映画と朗読の集い～ポーランド、サハリン、北海道～(講演要旨)

### ピウスツキの生涯と仕事

井上 絃一

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866～1918)はリトワニア生まれの優れた人類学者です。今年パリで客死してからまさに百年が経過、命日の5月17日にはパリとモンモランシー(フランス)、ジョルイ(ポーランド)、白老で追悼行事が挙行されました。本日のイベントも没後百年を記念するものです。

ピウスツキの生涯は、幼少年時代のリトワニア期(1866～86)、ペテルブルグ期(86～87)、流謫先の樺太島北部で過ごしたサハリン前期(87～99)、浦塩期(1899～1902)、研究者として実地踏査に従事したサハリン後期(1902～05)、日本経由で帰還して

以降の欧州期(06～18)の6時期に区分されます。

今回は時間の都合で、ピウスツキの画像を手引きとして各時期を大掴みに解説するに留めます。詳細については、末尾の資料を御参照ください。

ピウスツキはサハリン前期にニヴフ、後期にはアイヌ(エンチュ)、ウイлтаのフィールドワークに従事し、辛うじて保持されてきた彼らの言語や伝統文化を鋭敏な耳とあたたかい心で、エディソン式蠟管蓄音機やカメラなどの近代機器も駆使して記録、希有な学術遺産を残しました。彼の仕事はアイヌ学・ニヴフ学・ツングース学の草分けとして高く評価されています。欧州期にはリトワニア人やタトラ山地民の民俗研究で、また博物館学でも先駆的業績を残し、日本とポーランドの文化交流においても魁の



一人として活躍しました。

北海道大学医学部は、ピウスツキの妻チュフサンマの叔父に当たる「樺太酋長バフンケ」(日本名: 木村愛吉)の頭蓋骨を収蔵しています。児玉作左衛門医学部教授らが1936年8月、樺太東海岸の相浜で墓地を暴いて入手したものです。同大学は本年7月21日、遺族(ピウスツキとチュフサンマの孫・木村和保氏)からの請求に応じて遺骨の返還を決定した旨、木村氏へ通達しました。最後に、この問題にも言及するつもりです。

#### [参考資料]

高倉浩樹監修、井上紘一訳編・解説『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～』、仙台、2018

井上紘一「ピウスツキのサハリン研究とバフンケの髑髏(されこうべ)」(電子版) <http://hokkaido-poland.com/events/PilsudskiInoue20180225.pdf>  
井上紘一「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」改訂版(電子版) <http://hokkaido-poland.com/events/ChronologicalRecord201807.pdf>

## ピウスツキが収集したアイヌ衣文化

### 佐々木 史郎

ここでは、当企画のチラシやポスターにも使われているピウスツキの油彩肖像画(1912、クラクフ、アドマス・ヴァルナス作、スレユーヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館蔵)でピウスツキが着用している着物に着目し、それがどのような着物(素材、作り方)で、どの地方のものかを明らかにします。



B・ピウスツキはアイヌに関する論考と写真と音声資料を数多く残しましたが、それと同時に実物資料も少なからず収集しています。その主たる部分は現在ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー人類学民族学博物館(通称クンストカメラ)に収蔵されていますが、そのほかにも同市のロシア民族学博物館、ウラジオストクの沿海地方総合博物館、ユージノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館、さらにはドイツ・ライプツィヒの民族学博物館、オーストリア・ウィーンの世界文化博物館などにも収蔵されています。

この肖像画でピウスツキが着用しているのは、その布地の色合いと文様から、サハリンのアイヌに特徴的な衣服である「テタラペ」の可能性が高いのです。テタラペとは「白いもの」という意味で、その主要な素材であるイラクサ繊維の布が白く輝くことからそのように呼ばれたといわれます。サハリンでは、北海道のアイヌが多用したオヒョウ、シナノキなどの長い繊維が取れる樹木が少なかったためか、イラク

サから繊維を取ることが多く、テタラペはサハリンに特徴的な衣服です。

ピウスツキが着用しているテタラペでは、衿周りや肩から背中にかけて、そして袖口に独特の文様が見られます。その描かれ方から、まず幅の広い藍木綿を縫い付け、その上に赤い綿織物もしくは毛織物の布を切って伏せ、その縁と中程に色糸の刺繍を施して留めていると判断できます。赤い布の上に少し間延びしたハート型の模様が見えます。

この種のテタラペはヨーロッパ、ロシア、日本の博物館に何点か収蔵されています。最も似たものはロシア民族学博物館が所蔵する、V・P・ヴァシーリエフがサハリン東海岸のアイ・コタン(後の栄浜村相浜)で1912年に収集したもの(下図)です。そこはピウスツキが1904年まで妻子とともに暮らしていたコタン(村)です。この肖像画でピウスツキが着ているテタラペは、彼の妻チュフサンマが愛情を込めて縫製した逸品だったのかもしれませんが。

(ささき・しろう、国立民族学博物館名誉教授)



V・P・ヴァシーリエフが収集したテタラペ(荻原真子、古原敏弘、V・V・ゴルバチョーヴァ編『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館、2007、149頁より)

## ピウスツキが日本に残したイメージ

### ～明治から現在まで～

### 新井 藤子

存命中から死後に至るまで、プロニスワフ・ピウスツキには実に多面的な人物像の記録が存在します。本協会においても、この2、3年に、新生ポーランド共和国初代国家首席のユゼフの兄として、世界有数の人類学者・アイヌ民族研究者として、それでありながら、今となってはワルシャワの雑踏の中で思い出されることもない傍流人物として語られ、かたや顕彰事業の中では、ロシア、ドイツ、リトアニアなど多岐にわたるナショナリティを想起させる地球人の魁として、さらには樺太アイヌ女性との悲恋をともなう婚姻を経験した碧眼の美丈夫として、多くの視点から様々な形のピウスツキの人物像が描かれ、あるいは史実とされる事柄が伝えられています。

もともとピウスツキには、二葉亭四迷が評した「あ

どけない真面目な態度」や、横山源之助による「学者的態度を以て研究するばかりでなく、正義博愛の観念強く」という記述にもみられるように、彼に関与するあらゆる人々をして、積極的に「～な人」と語らしめずにいられなくさせる魅力があったようです。これは彼の心優しい気質や教養あふれる振る舞いによるものであるのはもちろん、波乱や移動変転に満ちた生涯の行程のなせるものともいえます。

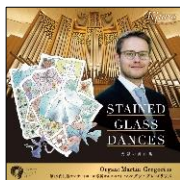
また、多くの歴史的記述や言説に触れていると、彼は無意識のうちに関わる人々の精神を鼓舞し、

生を前進させ、現実的に社会的な実績へと昇華させる才にも長けていたことが窺い知れます。その一事例としては、欧州帰還後のピウスツキによるポーランド民族音楽調査研究が、ショパン没後のポーランドを代表する偉大な作曲家カロル・シマノフスキへ多大な影響を与えていたことが挙げられます。

ここでは、明治期から現在まで、また、生活、労働、恋愛、研究、人物交流等のジャンルから、主に日本の資料にのこされている、多様なピウスツキの人物像に触れます。 (あらい・ふじこ)



木村和保（プロニスワフの孫）、井上統一、佐々木史郎、新井藤子、朗読：長屋のり子、白井順、酒谷茂靖 (写真 尾形芳秀)



《新会員のひとこと》

**Kitara**の仕事から  
篠原 朗子

札幌コンサートホール **Kitara** には、日本で最大規模を誇るパイプオルガンが設置されています。オルガンの魅力を発信するために、**Kitara** には、ヨーロッパから若手演奏家を1年間の任期で専属オルガニストとして招聘する制度があり、これまでに19名が札幌へやってきました。マリア・マグダレナ・カチオルさん(第15代)、マルタン・グレゴリウスさん(第19代)の2名がポーランド出身です。

専属オルガニストは、**Kitara** 主催のコンサートのほか、小学校へのアウトリーチ、地元の音楽大学の学生向けの特別講義、他のホールや教会等でのコンサートへの出演など幅広い活動を行っています。

私は **Kitara** の主催事業の担当部署で働いています。カチオルさん、グレゴリウスさんのおかげでポーランドについて知るチャンスに恵まれ、この国が大好きになりました。特に心に残っているのは、カチオルさんから聞いたクリスマスのお話です。ガラス製のオーナメントで飾られたツリー、夜中に行われる教会のミサとクリスマス・キャロル…。家族で穏やかに過ごすポーランドのクリスマスの情景が目には浮かび、あたたかい気持ちになりました。

カチオルさん、グレゴリウスさんのコンサートでは、**Kitara** では演奏されなかったポーランドの作曲家によるオルガン作品を紹介してもらいました。私が特に

好きな曲は、美しい詩のようなメロディが印象的な、スジンスキの「悲歌」です。7月に発売されたばかりのグレゴリウスさんの CD (写真) に収録されている、現代作曲家サヴァの「踊る絵」もすてきな曲です。

残念ながら、私はポーランドに行ったことがないのですが、いつか訪れてみたいと思っています。グレゴリウスさんが幼い頃に運命的な出会いをしたという、グダンスクのオリーヴァ大聖堂のオルガンの音色を聴きに行きたいし、カチオルさんおすすめのバラのジャム入りパンチキも食べてみたい。ポーランドへの夢は広がるばかりです。 (しのはら・あきこ)

**小林浩子と申します**



はじめまして。このたび協会に入会させていただきました、小林浩子と申します。

音楽・映画鑑賞が趣味の私に、会員の友人より何度かお誘いがあり、時計台コンサート、アンジェイ・ワイドの映画会と参加させていただきました。

江別の「ども」での〈午後のポエジア〉では、会員の皆様とポーランド人の方々の交流に参加して、楽しい雰囲気、私もこの会のお仲間になりたいと思入会致しました。

実は、ヨーロッパの国々には旅行していながら、ポーランドには立ち寄ったことがありません。ポーランドについては、ショパンと、アウシュビッツのことくらいしか触れる機会がありませんでした。これからは、いろいろな知識を深めていきたいと楽しみにしております。どうぞよろしく願います。 (こばやし・ひろこ)



〈第 83 回例会、ドラマシアターども、2018.5.26〉

## 朗読とお茶の会「午後のポエジア」 8

村田 謙

「午後のポエジア」8は2部構成である。

第1部は「もう一人の宮沢賢治～風と光にのって」と題し、舞台の後方には列車のボックス席を模した椅子を配して、宮沢賢治作品もしくは賢治のための自作詩の朗読である。まず暗い舞台を進み出るのは霜田千代麿氏、春と修羅の「序」。連ねる明滅、保ち続ける影と光、その通りの心象風景のスケッチから始まりを告げるのだ。

次いで小林暁子、松山敏の二氏による「風の又三郎」。みんながガヤガヤとするなかを交互に読みあげる。又三郎が何かをするたびに風が吹くのだと、絵本の画面がスクリーンに映し出る、風の神だ。それからそれから、あとはどうだい、それから、よその町に行ってしまうまで。

再登壇した霜田氏が跪く。トランクのなかからひろいあげるのは「無声慟哭」、昔の映像と今の自分との重ね合わせ、映像の中と外に響きあう。ああ、そんなになく眼をそらしてはいけない、と。

「オホーツク挽歌」から菅原みえ子氏が選出した「噴火湾(ノクターン)」、天の音楽、噴火湾の黎明のあかりを、トシが隠されているかもしれないその寂しさを、ピアノの音に紛れさせながら妹を思う。

柴田望氏は「集合写真」という自作詩を舞台上に写し出してくる。カメラのあった時代の眼差しを。してはいけないことを繰り返す、自分というものの言いたいことを言う、その釣り合いのなか。

「よだかの星」を村咲紫音氏が淡々と声という音にする、自分の居場所などありはしないとの思いに、ふと松山敏氏のサクスの野太い、ときとして激しい音が、星を望む願いをゆっくりと燃え上がらせながら舞台を横切っていく。

村田謙氏は「春と修羅」、春のなかでただ一人の修羅は、その場にただデクのように立ち上がり渦巻く命の捩れ、ZYPRESSEN・春のいちれつと声で描く。

「永訣の朝」、苦しい表情で今朝のことを、まるで語り継ぐように斉藤征義氏が吐き出していく。遠くに行ってしまう私の妹よ。—あめゆじゆとてちてけんじや—この雪の、うつくしい雪の、おまえが食べるふたわんの雪に、願う。

長屋のり子氏は自作の「イーハトーブの軽便鉄道」を軽いタッチで、様々な賢治の足跡をピアノの譜面に載せているかのように、見かけた車窓の風景のように謳いあげていく。

霜田氏は「どっどどどっどど、どどうどどうど」と

の掛け声のなか、一気に「風」という文字を吹き現わせ、墨の色を流すのだ。

第2部は「ポーランドの詩と音楽」である。まず最初は、2011年の東日本大震災のときのことをベースとして世界中の「こんにちは」「ありがとう」を紙芝居仕立てに表現する。

没後20年のポーランドの詩人、ズビグニェフ・ヘルベルト氏の「若いクジラの葬式」。鯨のぬいぐるみをまずは寝かしつけてから、ミハウ・マズル氏がポーランド語で、R・ジェプカの日本語訳を菅原みえ子氏が担当した。くろい砂糖壺のような谷間の小径、無限の砂、太陽の蝶結び、花束のリボン。グラスホッパーが泣く、逃げる白い酸素、喪の行進、もぎとられるメロン、さらば。

シルヴィア・オレーヤージュ氏は「ためらうニケ」をポーランド語と自身の日本語訳で披露する。灰色の道、若者たちの命の尽きるところの大地、ニケがキスしようとしても戦場から逃げようとはしない若者、明け方に目にしなければならぬものを知りながら。

「コギトさんの怪物」にラファウ・ジェプカ氏と村咲紫音氏が挑む。戦略の第一原則は敵を知ること。しかし怪物と言えど一緒に住めばいいという人々も出てきて。自分という存在の卑屈さ、それでも戦いたい、出てこいと叫び。早くしなければ窒息がやってくる。

たどたどしく思えるリリアナ・コヴァルスカ氏の朗読「小石」である。が、ミコワイ・ジェプカ氏の日本語訳を聞くと、自分の境界を守る、熱気と冷たさと。飼いならすことのできない小石のじっと人間を見つめている姿と、拙さの語りとが、重なって見えた。

その後ポーランドの朗読者と観客が舞台に集まり「誰かに愛された」の大合唱、伴奏を安藤むつみ氏が担務。終了後にはワインと軽食による交流会となったのである。(むらた・じょう、北海道詩人協会会長)  
(吟遊記 2018/6/2 より)



「午後のポエジア」8フィナーレ

〈第 82 回例会：講演と映画「コルチャック先生の思想と生涯」、札幌エルプラザ、2018.3.24〉

## ～ポーランドの旅 帰国報告～

塚本 智宏

映画『コルチャック先生』の上映に合わせて、上記テーマで講演の機会が与えられた。映画については前号で書いたので省略し、講演で主に言及した冬のコルチャック・ポーランドスタディツアーで得た、特にポーランド子どもオンブズマンに関する情報を紹介して、依頼された講演要旨に代えたい。

ツアーの行き先は、ワルシャワとクラクフ及びその近郊(コルチャック記念館、ポーランド国立ユダヤ博物館、子どもオンブズマン庁、トレ布林カ及びアウシュビッツなど)で、コルチャックの思想と生涯からの学びをメインテーマにしたスタディツアーである。

コルチャック記念館では、館長・史料研究者マルタ・チェシエルスカさんに講演を依頼し、長らくコルチャック史料研究(全集[1992～]の編纂)に携わってきたことをお話しいただいた。コルチャックは世界的な子どもの権利思想や実践の開拓者の一人として注目されるが、彼はより広い視野で子どもを捉えようとして、これを(1)(大人との)「対等な」人間関係において、(2)「各自の自律的な生き方」を持つ人間として、(3)「各個人の尊重と尊厳」が重んぜられるべきだという思想をもっていたと紹介し、さらに彼の行動のスタイルは多様で、教育実践の中では(個々の)子どもの権利を、他方では社会制度上の憲法や国際的なジュネーブ宣言のレベルでの子どもの権利保障も要求し、現代でいう子どもオンブズマン(子どもの権利の擁護官)として活動したと、彼の思想と活動を手短かに的確にお話しいただいた。

この講演を聴きながらコルチャックの体験したエピソードを思い出した。彼がある非行少年の弁護において、人類の社会的な利益の三分の一は子ども

に”お恵み”ではなく”権利”として与えられるべきだと主張したのに対して、それが具体的には何のことかと尋ねた当時のワルシャワの裁判官が「わかりだと思いますが、これは私には全く初めてのことで。私は過去の一度も子どもが人間であるなどと考えたことはありません」と言ったのである。

この講演のあと子どもオンブズマン庁を訪問し懇談したが、そこでの姿勢や事業にコルチャックの思想の継承を感じ取るようになった。現長官(8月末まで)はコルチャックの思想を学んだ人物で、彼の論文や講演には必ずといっていいほどコルチャックが引用され、また彼自身直に全国の子どもからの相談(子ども信頼電話)にのったりすることもあるという。全国での大人向け啓発ポスターには、子どもを軽視・見下さず一個の人間として尊重してくださいというメッセージがあり、この庁の発足(2000)以降につくられた「子どもの権利法典 Kodeks Praw Dziecka」全10条の前文には、「覚えておいてください—人間の権利は、子どもの権利から始まる！」と規定されている。今後もポーランドの子どもに対するオンブズマンの動向(≠大人の姿勢)を追跡してみたい。

(つかもと・ちひろ)



(左) オンブズマンスコットと信頼電話小カップ  
(右) 子ども版パンフ子どもの権利条約

## ジョルィ市のピウスツキ没後百年記念行事に参加して

尾形 芳秀

去る5月、ポーランド・シロンスク県の県都カトヴツエ近郊にあるジョルィ市立博物館において、ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年を記念する展示のオープニングと銅像の除幕式に出席しました。

この一連の行事は、5月にジョルィ博物館で始まり、ポーランドが独立を回復した記念日の11月11日まで続きます。今後はクラクフの日本美術技術博物館でも同様のシンポジウムが開催されます。この会期は兄ブロニスワフの命日から弟ユゼフの初

代元首就任までで、ピウスツキ兄弟がポーランドの独立回復に大きく貢献したことを示しています。

ジョルィ市立博物館は企画展や展示方法において高く評価され、ヨーロッパ各地の同規模の博物館の中でも高い評価で知られています。

今回はポーランドでは初となるブロニスワフ像の除幕式が行われました。この像は、ブロニスワフの前でアイヌ女性の語り部が蝸管蓄音機で収録する様子をモチーフとしています。この像の近くには、



1903年の北海道アイヌ調査を率いたヴァツワフ・シエロシエフスキの像もあり、二人はサハリンや北海道のアイヌについて語り合っていることでしょう。

式典には、二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治館長、平取町教育長庄野剛氏と平取のアイヌ工芸家関根真紀夫妻、北大アイヌ・先住民研究センター山崎幸治准教授(博物館学)も出席されました。

ピウスツキの親族からは、5月17日モンモランシー墓地とパリ・ノートルダム大聖堂で追悼式に参加された、英国在住のヴィルト・コヴァルスキ氏とご子息アレクサンデル氏、ユゼフのひ孫ダヌタ・オニシキェヴィチ氏が参加されました。中でもアレクサンデル氏はブロンスワフに本当によく似ていて驚きました。

そのほか、ヴァルデマル・チェホフスキ監督、トルンのアルフレド・マイェヴィチ教授、クラクフの日本美術技術博物館のカタジナ・ノヴァク副館長やアンナ・クルル学芸員ら旧知の方々にもお会いできて、2013年白老におけるピウスツキ像除幕式や、2017年白老・平取訪問の思い出に話が弾みました。

来賓の祝辞では在ポーランド日本大使館高橋了臨時代理大使が挨拶されました。歓迎晩さん会では当会が代理大使の隣の席に指定されました。

この企画を当初から支援されてきた、前ポーランド広報文化センター所長ミロスワフ・ブワシチャック氏(現ポーランド・日本交流センター代表)も出席され、さらに元広報文化センター職員でピアニストの栗原美穂さんの「現代音楽における日本文化のさまざまなイメージ」と題する演奏会の司会を務められ、

日本通らしく曲の内容を懇切丁寧に解説されました。そのなかで、この企画展に対する当会の支援とこれまでの長年の日本とポーランドの交流活動に対して感謝の言葉が述べられました。

また、この企画のスタートから全てにわたってコーディネートされたワルシャワ在住の松本照男氏に、ジョルイ市立博物館・同市博物館審議会より感謝状と記念品が贈呈されました。

白老や札幌でもお会いしたポーランドの旧知の人々と旧交を温めることができたのは幸いでした。夜はほぼ毎晩ディナーに招かれ過分な接待を受けました。中でも旧シュラフタの館での晩さん会では往時を偲ぶことができました。

最後になりましたが、ルチアン・ブハリック博物館長が過密なスケジュールの中、自ら運転して近郊の文化遺産の紹介や送迎に奔走してくださったことに感謝したいと思います。(おがた・よしひで)



左:ブハリック・ジョルイ市立博物館長、  
右:ブワシチャック前ポーランド広報文化センター所長

## 2018 ポーランド憲法記念日レセプションに出席して

5月23日ポーランド憲法記念日のレセプションに出席いたしました。ご存知とは思いますが、ポーランドの憲法記念日は戦後日本の憲法記念日と同じ5月3日で、民主的な憲法としては世界的にも米国に次ぐ2番目に古い憲法となっております。

今年はポーランド独立回復から100年目ということで、ヤツェク・イズドルチク駐日ポーランド共和国大使のカタコトの日本語を交えた式辞の挨拶にも力がこもっていたように感じました。

アトラクションとしてショパンの「革命」のピアノ演奏がありました。舞台には両国の国旗とともに、群馬県の作者による日本の着物「友禅」も展示されていて、存在感をアピールしていました。

引き続き、参議院日本ポーランド友好議員連盟会長・中曽根弘文参議院議員による祝辞と乾杯の挨拶がありました。

当日は、元駐日ポーランド大使で、今や、日本の伝統芸能である能の作者でもある、ヤドヴィガ・ロドヴィッチさんも出席されていて、同席されたピアニストの遠藤郁子さんらとも和やかに近況を語り合っておられました。(霜田 英麿、東京事務所長)



(左より) 筆者、イズドルチク大使、遠藤郁子さん



今後の予定

《第 32 回定例総会&懇親会》、会場:豊平館(中島公園内)、日時:2018 年 11 月 11 日(日、ポーランド独立回復百周年記念日)16:00~総会、17:30~懇親会(入場無料、ポットラック式[一品持ち寄り]パーティ)。お誘いあわせでご参加ください。

〈後援〉

♪松井亜樹ソプラノリサイタル〜ドームラ奏者アンドレイ・クガエフスキー氏をお迎えして〜、ふきのとうホール、2018 年 9 月 21 日(金)開場 18:30 開演 19:00、入場料/前売:一般 3,000 円、学生 1,500 円、当日:一般 3,500 円、学生 2,000 円、お問合せ 011-742-1708

♪徳田貴子ピアノリサイタル、ザ・ルーテルホール、2018 年 10 月 28 日(日)開場 18:30 開演 19:00、入場料:大人 1,500 円、中高生 500 円、小学生以下無料、お問合せ tokudatakako@gmail.com

♪北濱佑麻&徳田貴子ピアノデュオ・リサイタル、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2019 年 1 月 23 日(水)開場 18:30 開演 19:00、入場料:一般 2,000 円、中高生 1,000 円、小学生以下無料(全席自由)、お問合せ 080-6081-1941 (徳田)tokudatakako@gmail.com

入会・退会(ご芳名、敬称略、2018.4~9)

入会:大賀美紀子、渡辺宗子、嵩文彦  
退会:薄井豊美、片山明石、中舘景子

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(敬称略)

(2018.4~9)水上淳也(1)、松山敬子(7)(1 口千円)

新年度(2018.9~2019.8)会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500 円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。



【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ ご請求額については、個別の納入お願い文書と振替用紙をお送りします。

『ポーレ』原稿募集

エッセイ(旅行記、新刊紹介、映画・演劇・演奏会の感想)、研究(歴史、社会、経済)、俳句・詩その他なんでも歓迎。事務局へご連絡ください。

住所変更・メールアドレスのご連絡を!

転居された方、イベント予定などのメールが届いていない方は事務局(1ページ目左上参照)へご連絡を。

目次

《第 32 回定例総会&懇親会》..... 1  
 〈創立 30 周年記念演奏会より〉現代に生きるショパン(三浦洋)..... 2  
 ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチヨノ、霜田千代麿)..... 3  
 〈第 86 回例会〉マルタン・グレゴリウス 北大オルガンを奏でる〜ポーランド オルガン音楽の 500 年〜  
 プログラムノート ..... 4  
 (高橋健一郎)..... 5  
 ブロニスワフ・ピウスツキの没後百年記念イベント(井上紘一)..... 6  
 〈第 85 回例会〉講演と映画と朗読の集い〜ポーランド、サハリン、北海道〜(講演要旨)  
 ピウスツキの生涯と仕事(井上紘一)..... 6  
 ピウスツキが収集したアイヌ衣文化(佐々木史郎)..... 7  
 ピウスツキが日本に残したイメージ〜明治から現在まで〜(新井藤子)..... 7  
 《新会員のひとこと》Kitara の仕事から(篠原朗子)／小林浩子と申します ..... 8  
 〈第 83 回例会〉朗読とお茶の会「午後のポエジア」8(村田譲)..... 9  
 〈第 82 回例会〉コルチャック先生の思想と生涯〜ポーランドの旅 帰国報告〜(塚本智宏)..... 10  
 ジョルイ市のピウスツキ没後百年記念行事に参加して(尾形芳秀)..... 10  
 2018 ポーランド憲法記念日レセプションに出席して(霜田英麿)..... 11